

海と島と船 魏志倭人伝解釈の欠落点

菅 輝 生

古代史ブームとかで、いわゆる『魏志倭人伝』の研究
者も巷にはそれこそゴマン(本当に五万人はいるらしい)
もあるということで、僕のような後進の数奇者にはおも
わず気がとおくなってしまいうのだが、ニッポン古代国家
成立の解明のカギといわれている『魏志』を読んで僕が
不思議におもうのは、今日の魏志研究者のほとんどが、
当時のシナの魏志編集者たちが地理的ヤマトを、ヤマト
の政治的・文化的状況、すなわちマツリゴトの諸状況を
あたかも遠眼鏡で眺望したかのように熟知している、と
おもっていることだ。僕がおもうには、ここには△海と
島と船▽の歴史的、思想的契機が欠落している。

周知のとおり、いわゆる『魏志倭人伝』の冒頭は、△
倭人は帯方の東南大海の中に在り、山島に依りて国邑を
為す▽という文章で始まっている。僕は、ここで△島
▽という地形的概念にまず注目しなければならぬ。とい
うのは、古代ヤマト人と、今日の日本人および中国人と
では、△島▽という概念には大なる相違点がみられるか

らである。

古代ヤマト人の△シマ▽とは、古事記における△半島
▽や△岬▽が△シマ▽と記述されているとおり、三方を
海に面している地形にたいする名称であった。朝鮮語の
△シム▽も、古代ヤマト語の△シマ▽と同様の概念で
あり、中国人や今日の日本人が四方を海で囲まれた土地
だけを△島▽というのとは、ことばのニュアンスがかな
り相違するという事実を、僕は知らなければならぬ。
つまり、△島▽は△シマ▽に含まれるのである。

では、△山島▽とは、いかなる地形的概念であるか。
これは普通解されているがごとく、ヤマトの地形的特徴
をあらわしている。

中国人の大陸的な△眼▽で見ずとも、日本は明らかに
山ばかりの島国(シムナラ)ではあるが、大陸とヤマ
ト、あるいはヤマトのシマジマを連絡する渡海船からみ
れば、古代ヤマト的感觉でも日本は十分に山高い△シマ
▽△グニ▽ではあった。この意味では、学者先生や巷の
俗流研究者の△島▽と△シマ▽の混同は、魏志編集者た

ちが両者の区別を知らなかったということを考えてみて
もたいした問題ではない。

にもかかわらず、僕が△島▽と△シマ▽の区別を強調
するのは、四方あるいは三方を海に面する地形の交通手
段を考えるからである。というのは、△島▽は絶対的に
そうであるが、三方を海に接しているシマも交通手段と
しては船がもっとも便利なはずであるからだ。そして△
山島▽であるシマは、三方を海に接していると同時に背
後に険しい山によってとざされてあり、江戸時代までの
交通（とくに輸送）が主として陸路よりも海路に重点が
おかれていたように、海上交通の方が山犬に襲われると
いう心配もなく、はるかに危険性がすくないのである。

2

ここで、僕らは、魏志編集者たちが△邪馬台国▽まで
に至る道標をあらわすことばとして盛んにもちいた△水
行▽に注目しなければならぬ。文明国シナの編集者たち
は見たこともない遙かな東南大海の、恐らく野蛮な山島
・ヤマトを速い速い絶速のクニとみたら、意識的にア
イマイな△水行▽幾日という距離感覚でしめそうとした
のかも知れない。

がしかし、僕はそれだけではないと考える。というの
は、すでに述べたように、船による交通、すなわち△水

行▽という交通手段の方が、より一般的であったからだ。
島づたい、あるいはシマづたい△海岸に循って水行▽と
いう方法が陸路よりどんなに便利で安全であったかを想
起する必要がある。

魏志編集者たちは、このことを過大評価したにちが
ない。それには恐らく一理ある。というのは、当時のヤ
マトの常民たちは、ヤマトの国家が中国に朝貢していた
という△歴史的事実▽よりも、△えにし▽ある大陸に自
由に渡海していたと想われるからである。

『魏志』には中国から邪馬台国にいたる道程が書か
れているが、事実とは逆であったはずである。しかも、それ
は国家と国家との交流ではなかったと考える方が、恐ら
く常識的であろう。シマの内陸部にひきこもったヤマト
のクニグニよりも、海に接した島やシマに住むムラビト
の方が渡海に対して勇敢であったに違いない。僕らは、
古人のヤマト人が今日の日本人よりも△諸外国▽（とく
に半島や大陸）との交流で劣っていると考えるはならぬ
のである。むしろ、古代のヤマトの人びとは、中国や朝
鮮の沿岸の人びとと自由に交流していたに違いないので
ある。

つまり、大陸との常民的段階の交流においては、後の
遣隋使船、遣唐使船の段階における航路よりも多様で頻

繁であったのだ。

魏志の編集者たちは、日中両人民のこうした常民的段
階における交流を歴史書を編集する過程で文章化し、遙
かな野蛮なヤマトが文明国シナに朝貢しているのだとい
うことを誇示するために、△水行▽などというアイマイ
な表現を採ったのだとおもわれる。僕の、この推察は、
魏志における吾々の民族がヤポネシア的であることから
も、将来その正しさが証明できるかも知れない。

3

魏志倭人伝には、渡海の際、持衰の風習があったこと
を記述しているが、渡海船がどのような船であったか、
は記録していない。むしろ、僕も日本の船の変遷史につ
いて知識が絶対的に乏しいので、それを明かにすること
ができない。

しかし、常民的段階の交流に用いた船は、遣隋使船や
遣唐使船（肥前国風土記の松浦郡の項に遣唐使船のこ
とが書かれているが、どんな船であったかは書かれていな
い）などとくらべると、はるかに粗末な船であったろう
ことは想像できるのである。そして、それにもかかわら
ず、常民の船の方が外交に用いた船よりも目的を達した
であろうことを、僕は断言できる。

というのは、前述したように、常民の船は国家間の交

流による航路よりも多様であったからだ。つまり、古代
の日本を取巻く政治的状况にかかわることがなかったか
らである。

僕らは遣隋使船と遣唐使船とは政治的配慮によって
航路がちがうということを知っている。そして、遣唐使
たちが渡海に大きな危険性をかけたことも知っている。
途中でいくども難波し、ある者は死に、ある者は挫折し、
ある者は異郷の地で客死したことを知っている。

それらの失敗の原因は、直接的にも間接的にも国家権
力によるもの、といえる。直接的には航路の政治・外交
的確定化。間接的には国家の体面をつくらうための船の
大型化がそうである。

第一点についてはすでに述べた。第二点については、
今日的な感覚からすれば、同意してもらえぬかもしれぬ。
しかし、これはさきほどもふれたように、日本の船の変
遷史が解明されぬかぎり速断できないが、船の大型化は
それにもなう造船技術（材料の入手も含めて）と、航
海技術が飛躍的に発達しないかぎり困難であるという説
明から、あるていど納得していただきたい。

このことは、ヤポネシアの、つまり沖縄・奄美・薩南
諸島や伊豆諸島の小さな原始的な船が、つい最近まで、
かなりの範囲で活躍していたということを考えてもらい

たい（僕が昨年、本誌に発表した短篇小説（？）『みちのしま』に登場する船を想起していただきたい。

私見では、魏志すなわち日本の古代国家の成立を検討するには、この△海と島と船▽とりわけ△船▽のもつ歴史的契機を十分に考慮に入れる必要があるとおもふ。そ

たそがれ日記

秋田雨雀

ロシアの盲目のエスベランチストでトルストイヤンのワシリー・エロシエニコが来たとき（一九一四年）秋田さんが劇場で大杉に会って紹介するとき「この人は社会改良家」レフォルミストだ」と言ったのが、大杉に気に入くわす、あいさつもしなかったそう。人の前でアナキストだということを躊躇したことで、当時の文士連の★ザな気風がうかがわれる。

その後、大杉の記念会をアナキスト連盟で催したときは秋田も出席した。私はこのときエスベランチストでしゃべり、大杉がエスベランチ運動の率先者であり、労働者のエス語運動の日本での最初の人であったことを話し

れを無視することに通じるとおもふ。

そして同時に、僕らが日本の（反）国家論を論じる際にも、けっして欠落させてはならない視点であると考え

（一九七二・三・二〇）

山鹿泰治

した。日本語の通訳を磯部君にしてもらった。話の途中熱帯魚屋が私の話を中絶させようとしたが、一喝して静まらせた場面もあった。秋田はその時私に応援した。

秋田は劇作家で、コミニストに仲間が多く、弘前に住んでいて一人生き残った孫娘が自殺して孤独になった。エスベランチストの中には彼のために家を建ててやる相談もあったが実現しなかった。その間、青少年の自殺を反省させる運動を組織し、間もなく死去した。白髪にトルコ帽の紫のピロイドに金糸の刺繍という詩人らしいスタイルで麻布で公演したのを見たのが最後だった。

野火

亡命キューバ・リベルテール活動からのレポート

アナキスト連盟国際大会は昨年八月に開かれたが、その事務局から何の連絡も来なくなっているために、それが開かれたことを知ったのはORRA（アナルシスト革命組織）の機関紙によってであった。最初力を入れたフランス・アナルシスト連盟の機関紙、ル・モンド・リベルテールでも取上げていない。ORRAのフロン・リベルテール・デ・リュット・ド・クラス（階級闘争リベルテール戦線）紙九月号によれば、フランスで代表を送ったのはORRA、FAF（フランスアナルシスト連盟）、UFA（アナルシスト連合同盟）の三つになっており、その他十八ヶ国の代表が集まったことになっている。日本からはOSL（リベルテール社会主義者会議）代表として江口君が出席している。ORRAの報告によっても亡命キューバ代表の資格が問題になったことが書かれているが、このキューバ・リポートは、そのことに関してである。

キューバ代表が問題になったのは「自由主義的改良主義者」だというのだ。こんな折紙付きにされたことに対する反論である。要約して見よう。

「もっとも政治的ブルジョア的な言葉、そしてもっとも憎悪すべき議会的手続すなわちギロチン（議会用語で討論打ち切り）といったものによって与えられた……自由主義的改良主義者という非難は、アナルシスト、イデオロギーの圏外にある者だとすることである」。

「この動議を推進したのは自称コスタ・リカ代表、自称コロンビア代表、ウルガイの代表、それにイタリア・アナルシスト連盟とそれに委任したメキシコ・アナルシスト連盟で、その他に代表を送らなかったフランス・アナルシスト連盟からの分離グループの諸代表である」。

「コスタ・リカには組織的なアナルシスト活動は行われていない。コロンビアでも同様で、ウルガイでは運動はいくつにも分裂していて、その一グループの代表が出席しているのだ」。改良主義者という言葉には二つの解釈がある。一つは、今世紀の始めから共産主義者たちに支持されたもので、彼等と同じ考え方をしない者、特に議会活動によって社会変革をしようとする議会主義的社会主義者を指したもので、この意味ではわれわれは改良主義者ではない。もう一つは、われわれの目的を実現するために、それに層一層肉薄するため、人類共存を目指す業績を日毎に達成する社会条件の継続的改善の方向に行かねばならないといった意味では、われわれは改良主

義者である。われわれが望んでいる新しい社会、リベルテールの社会は、暴力によって、政府の魔術によって、会議その他によって建設されるものではない。われわれの理論家の誰一人として、こうした奇蹟的な、神様のよきな思想を持った者はいない。われわれの理想は諸国民が自由を目ざしていただく衝動によって次第に実現されるのである」。改良主義者という言葉はマルクス主義者の折伏の悪罵用語の一つであるが、アナリストの国際大会でまで、軽々しく問題にしている。生物が微少な一つの新しい適応形質を獲得するために、数千年の年月と莫大な生命の犠牲を払っていること、そしてある日偶然のように、そうした変化が行われていること、さらにそうした変化が起ったとき環境がすでに変化したりしている場合もあることなどを考えても、「改良」「改革」「革命」といった言葉の意味は、もっと真剣に考えられねばならない。革命という言葉の悲壮感に迷う者には、アナリストであることの意味は分るまい。

古田大次郎の墓

4月15日黒戦社大島さんの発意で青山に古田の墓を訪ねた。参集したもの六、七名。折からの雨も小止みになり、群生した青木の江い若葉が燃える小さな囲いの中で



自然石の彼の墓は木ごもりにたずんでいた。そのさりげなさは道祖神のようだ。彼が何を想い、過ぎし方の何を悔悟しているか知る由もない。想うこと、考えることのすべては生者にある。死者をして語らせるのは「時」であろう。上掲はその際の記念写真。

(はしもと記)

※ティーチンのお知らせ

リベルテールでは8月に徹夜で語り明かす計画をたてました。アナキズムが人生哲学に過ぎぬ人。過去の社会運動の栄光を忘れかねている人。ニヒリズムにくさっている人。何に反抗するのか判らない人。ちょっと覗いてみたい人。いずれも歓迎します。真夏の夜の夢―誰に、何にめぐり逢えるか、課題をもってご参加下さい。詳細日時は追って知らせる。

海老根 茂君からの質問

リベルテール27号の野火の「相田博君から」についてさらに海老根君が次のような質問をよせた。

「現在の社会で△官僚制において上長に対する追従という封建的美徳が陰に陽に求められる事は、日本ばかりでなく世界各国で認められることだ▽が、では何故このように誰も彼も△封建的美徳▽を求めめるのか。なぜ資本家等に対し羨望(?)の眼で眺めるのか。これを突きつめていけば、なぜ資本家等は我々を搾取し、支配するのか。―これらは誠に馬鹿げた質問かも知れない。たいいていの人なら、こんな質問をしようものなら、物言いたげな目付をして嘲笑するかも知れない。しかし僕にはどうしても解らないことだ。いったい資本家は幸福なのだろうか。たしかに有余な財を持って何不自由なく暮らしているだろうか、しかしそれだけ(物質的満足)で人間は幸福になれるのだろうか。物質的欲望に関しては十分過ぎる程満足しているだろう。ならば精神的なものはどうだろう。物質的に欲望が満足出来れば、すなわち精神的にも同じように満足できるということはあり得ない。ある場合と程度においては物質的欲望⇨精神的欲望という成り立ちかも知れないが、全面的にはこういいう訳にはいかないだろう。資本家の幸福とは何だろう。これが僕の根本的な、しかも重大な疑問である」。○お答えしよう。問題は大きいし、ここで許される紙面で十分な解答になるかどうかは分らないが、不十分な点

はさらに質問していただいて、紙面であり、お会いしてなり、お答えすることにしよう。海老根君、馬鹿げた質問などと卑下してはいけない。嘲笑など、もっての外だ。どんなむつかしい哲学用語でも経済的術語でも、またマルクスの資本論のような大冊を出した所で、君の質問のような根本的な問題の解答にはならない。現在の社会で△封建的美徳▽が求められるのは、それによって、資本主義的に、階層的に構成されている社会的諸条件が変革されず、しかもそれに適応して生きる人々たちには一応安穩な生活が保証されるからに外ならない。と言えば平和が続くように聞えるかも知れないが、会社でも官庁でも要領よくこの美徳を発揮できる者とそうでないのがあって同じ美徳の持主の間で競争、嫉妬、策略に終始する世界であることは御承知の通りだ。それでもそうした中で我慢強く生きて居れば、「あの人は」と一応の社会的信用や名譽が得られる。金銭収入の多少で階層的に支配と服従の機構ができていくために、社会的地位が上位で収入の多い者ほど幸福と考えられている。十九世紀の社会思想として革命が要求されたのは、主としてこの物質的な富の平均を目指したものであった。それは精神的幸福に重点を置いた宗教が権力や富と妥協して民衆を支配したことに對する反動でもあり、科学の進歩についての

幻惑によるものでもあった。しかし今は貴兄が質問しているように「精神的幸福」を同時に考えねばならない時代になっている。クロボトキンの「パンの略取」は物質的条件の平等を主としたものであったが、その白鳥の歌は倫理学であった。われわれは物質的食物を必要とし、種族蕃殖の要求を持つ集団的動物であり、衣服や住居を必要とし、言語と思考によって社会生活を文化的にする人間である。集団のなか、社会のなかの個を哲学する人間である。人間の中には動物に近い人間から、集団と社会の中で個の在り方を思索し、人間の生を考える者まで種々雑多な者が居り、動物に近い人間は物質や物質を得るための交換手段である金銭を得ることを目的として生き、そこに幸福を見出すのみで、それが当然で正しいとしか考えない。そしてこれが大部分の者の常識とされている。政治も金銭で左右される。公害だと騒いで見ても大会社は大手をふつてのさばっている。皆が一緒に生きて行くために倫理に基礎をおかねばならないと考える者は、人間らしい人間であるはずだが、これが嘲笑されて「そんなことを言うのは世間知らずだ」と言われる。だから革命を考えざるを得ない。ところが実際にのさばっているのは権力革命の思想で、議会主義と暴力革命主義である。いずれも権力者または権力階級による階層制

支配を目ざすもので、現在の自由主義国家群で政権が経済に従属しているのに対して、政権が経済を支配する政経不分離という体制に移行するだけのことだ。保守的中央集権主義である。革命でなく政権交替である。暴力革命主義はクーデター主義といった方が分りやすい。赤軍派にかぎらず、前衛や政権交替を一日でも早く実現しようとする革命だ。民衆がドン底から要求する革命は決してこんなものではない。自由平等というのは階級や階層を温存して実現されることではない。

「精神的幸福」については紀元前のギリシャ時代から考えられ、要求されて来たのだが、人間の動物的な面の優越を主張する唯物論が横行したり、その反動として唯心論が主張されたりして、物心両面をそなえた二元的存在としての人間の解放は容易に実現しない。理想の実現のために、同調しない者は全部敵として殺さねばならないなどという神様のような権力革命主義者になってはならない。民衆は手を握り合ってこそ幸福なのだ。商業主義も権力主義も猜疑と憎悪を基礎としている。こうした基礎を崩すために、貴兄が言う「精神的幸福」が何かとすることが考えられない限り革命自体が迷蒙になるのだ。

(三浦)

クロンシュタット蜂起復権集会 一大阪一

三月十八日 大阪市立労働会館 一天地六社主催

次の報告が来た。

東京に連続して「クロンシュタット叛乱集会」を行ないました。集会には四十数名各地から集って来ました。

池田和義君が司会とあいさつをし、村上和民がクロンシュタット叛乱の経過とコメントを講じ、日野善太郎氏が「革命の問題」という内容の講演を行いました。いままで見なかつた人達が大量集まり、新気風が盛上がりそうな感じがします。

x

アナキスト叛国社 一福島県喜多方市天満前新明文方

巨大化する政治、経済、軍事、行政、文化のこの社会機構の中で、人びとは体制に編入され、登録され、疎外されつつある。このとき新しい生命をもって甦るもの、進行する腐蝕のなから、変革の核をつかみ出し、負の符号を転回させ、新たな真の連帯の契機を形成するもの

それがアナキズムである。アナキズムはテロの教義ではなく、組織破かいの原理でもない。あらゆるものの否定にのみ終始するユートピアンの願望でもない。アナキズムは自分で自分を解放する人間のもとも根源的で強じんな意志と情熱であると同時に、人間をあらゆる国家と権力と強制への隷属から解放放つプログラムを持つ。一た、非妥協的で明確な一つの政治思想である。

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月1回15日発行

昭和47年5月15日発行 Vo. III № 6

編集兼発行者 三浦精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)